山スキー山行記録

通算山行NO	Ｎｏ．１０７５（個人）	報告者	後藤隆徳
年　月　日	２００３年３月２１日（快晴）	２万５千図＝妙高山・赤倉・湯川内・関山	
山　　名	頸城山塊・火打山（２４６１ｍ）		
体力度＝６・非常に厳しい　技術度＝登山は４・やや難しい　スキーは５・難しい　危険度＝４・雪崩注意　頂上の展望＝６・妙高・焼山・雨飾・戸隠・日本海の３６０度			

３月の火打山に初シュプール

コースとタイム	２０日＝下土狩１３：００－杉ノ沢１６：００（泊）　２１日＝起床６：００－第三リフト終点ｈ発８：４５－黒沢池１２：００－火打山１５：２０－澄川源流１５：４５－澄川１３００ｍ地点１６：５５（泊）
標　高　差	上り・第三リフト～火打山＝約６００ｍ 下り・火打山～１３００ｍ地点＝約１１６０ｍ
参　加　者	ＣＬ・後藤隆徳（５６）＝厳しいゆえ、素晴らしき山々。 食料・加藤秀子（５４）＝澄川は凄い。こんな所もあるのだ。

２０日午後発。久し振りに妙高に向かう。前回、火打から笹倉温泉をやって以来だ。今回は初見ルートなので胸が騒ぐ。雪時雨の高速を降り、杉ノ沢スキー場下の「苗名の湯」に入る。

夕食を兼ねバイパスを少し下った、居酒屋「一粋」でエネルギーを補給。初めての店だったが、凄く感じが良く、ママが可愛かった。お通しの「イカ」の煮付けは卵が入り美味く、さっぱりした地酒がグッドだった。

後発の花澤に電話すると、来る予定だった焼津の松村氏は、急な忌引きで参加出来なくなったとのこと。食料は多く、テントが四人用で困った。一応、花沢に二人用のテントを持って来る様頼んだ。

しかし、後で重量を計ると四人用と同じレジャー用のテントなので結局、当初の四人用を持って行く。今後、メンバーの急な不参加も考え、計画しなければいけないのかと思った。杉ノ沢の駐車場に泊まる。トイレが２４Ｈ使えて良かった。

２１日。天気はサイコー。今年は雪も多く、第三リフトは最上部まで運行している。ただし、リフトは今年限りらしい。乗ったリフトの安全バーが自動に下がる初めてのタイプで２０Kg近く背負っている身には窮屈で首がおかしくなってしまった。

簡単に標高１８６０ｍに上がる。大石は腹の具合が悪く下のリフト乗り場にスキーで下った。（笑い）地元のテレマーカーと出発。ここに２～３日に降った春の雪が重い。

結局、例によって、何だかんだでトップを行く。今回は火打までの時間短縮で三田原

山に上らず、２１００m付近をトラバースして行く。しかし、兎に角、雪が重くて重くて苦戦した。２～３箇所、大きな沢があり要注意。それでも待望の火打がようやく見えてきた。雪が多いだけにその姿は、素晴らしく感動的。

休憩たび、ビーコン操作に慣れない加藤が訓練を行う。慣れればマアマア上手くいった。面倒なので黒沢池までシールで降りる。まだ誰も到着していなかった。腰を上げる頃、ようやく三田原山の稜線に動くものが確認出来た。茶臼山に上り返す。重荷がジワジワと利いてきた。

茶臼から小屋には降りず、そのまま稜線を行く。いよいよ火打が眼前に迫る。左下の小屋方面から５～６人パーティーが来た。物凄い馬力で我々を抜いていった。敵ながらあっぱれだった。有難く出来たトレースを使わせて頂く。

ラッセルが無いとまるで高速道路で大いに楽だった。澄川源流を望むコルに荷物を置いて頂上に向かう。頂上は一年に何回も無い快晴で正に３６０度の大展望。向こう側には日本海の水平線が広がっていた。

先行してくれた新潟パーティーにラッセルの礼を言い、写真を撮り合う。彼らは男性２、女性３名でこれから焼山方面でテン泊とのこと。若い女性もいたが、頼もしい限りだ。チョッピリ羨ましいね。さあ、ここから待望の滑降だ。今日はまだ誰も火打から滑っていない。我々が最初だった。

やや傾いた午後の陽光をいっぱい浴びて真っ更な火打の斜面に飛び込む。この頂上から滑ることを何度、夢見たことか。ただ、雪はやや重かった。それでも、火打にしっかりシュプールを描く。サイコーの気分だ。

後日談だがこの頃、大石・花澤はようやく高谷池ヒュッテに到着したようだ。（笑い）もちろん、この日の火打登頂は無く、翌日も上らなかった。大石はいくら山スキー泊まり山行が初めてとは言え、火打までわずか１時間半。もう少し頑張りが欲しかった。

コルから再び重荷を背負い澄川源流に向かう。コルから少しトラバースし物凄い急傾斜一枚バーンに突っ込む。まるで奈落の底に落ちるようだ。が、幸い雪はほどほど、軟らかいので全く問題は無い。ここは先日亡くなり、頚城山塊研究の第一人者だった蟹江健一氏の好きな所だったとか・・・。

氏が滑る、山スキー記録集「ベルグシーロイファー」の口絵写真を思い浮かべ、私もターンを続けた。振り仰ぐと加藤がまるで、大海に彷徨する小船のように、右に左にシュプールを刻む。凄い、凄い。余りに感動的なシーンだった。

落ちきると狭い沢が続く。アイスバーン・モナカ・深雪・・・。何でもござれをこなし滑り続ける。もう足は、体はメロメロ・ヘロヘロ・ガタガタだ。早くＢ・Ｃに到着したかった。

予定通り丁度標高１３００mに安全で快適なＢ・Ｃを建設する。ようやく重荷から開放された。前方に明日上る真っ白で端正な容雅山が見えた。夜は夏シュラフで寒かった。

年　月　日	２００３年３月２２日（土・晴）	報告者	加藤秀子
山　　名	澄川～新建尾根～容雅山（１４９８．５m）～大毛無山（１４２９m）	２５０００図＝赤倉・妙高山・湯川内・関山・	
体力度＝６・非常に厳しい　技術度＝登山は５・難しい、スキーは５・難しい			
コースとタイム	テン泊地発 7：40→新建尾根 8：15→容雅山 10：５０→悪水沢１２：００～１２：５０ー大毛無山１５：３０—１６：００—ＡＲＡＩスキー場駐車場１７：００着（Ｂ隊と合流）		
標　高　差	上り・澄川～容雅山＝約２００ｍ　悪水沢～大毛無山＝約６００ｍ		
参　加　者	ＣＬ・後藤隆徳（５６）、加藤秀子（５４）		

今までで一番厳しい山だった

「ウゥッ。さむ。」ブルッと身震いして目が覚めた。テントの薄い生地を通して、満月が映り、外は白々と白夜のように明るい。軽量化を図り、テントもシュラフも夏用でテント内はスースーと頭周りが寒くてどうにもならない。身体はシュラフとカバーの間に薄いビバークシートを挟み何とか寒さを凌いだ。目出帽をつけて帽子を目深にかぶり、日中と同じ出で立ちで再びシュラフにくるまる。

うつら、うつらしていると「頭が寒くて眠れない」とやはりＣＬが起き出した。こうなるともう寝てもいられない。すぐ朝食にかかる。朝から焼きそばだ。ソースの香りにつられて珍しく私も食が進んだ。そしてＣＬの日課のトイレ。その間に手早く片付けを済ませる。今回のゴミは、アルファ米一袋分のみ。事前に如何にゴミを出さないようにするか・・・検討に検討を重ねた結果の量は少ない。一人満足をしていると、『イヤァー。今日は飛びっきりイイやつが沢山出たヨ。久し振りだなぁ。』とほかほか湯気のでそうな黄金をたんまり手に下げて戻ってきた CL の嬉しそうな顔。見ると、ゴミの量よりウンチの方が多い。参った。

高曇りの中をスキーで滑り出した。雪面は真っ白で凹凸が全くわからない。慎重に滑っていても時々ガクンと落ちて膝にモーレツな負担がかかる。そのうち立っているのか、横になっているのか、わからない状態の船酔い？山酔い？雪酔いで、目はクラクラ。身体はユラユラ。雪は少しモナカっぽい。バランスを辛うじてとりながら、１３００m地点で左上の新建尾根へ登れそうな所を探し出す。

運の助けとはこの事か。丁度止まった一歩その先は滝になっていたのだ。「危なかった

ねぇ」と話しているところで、雪面がパックリ割れたクレバスに気がつき、ＣＬに『危ないよ！』と言葉を掛けた瞬間、『うわぁー！』ＣＬの左足がストンと落ちてしまった。『ヤバイ！』目の前から一瞬にして消えたCL。ところがまたまた運が良いっつうのか。片足、半身が落ちかかる寸前に、また偶然傍にいた私がザックを咄嗟に鷲掴みにしていた。動くと崩れそうな雪から必死で引き上げた。

あとで恐る恐る下を見ると、ブラックホールのような大きな口が奈落の底に引きずり込むようにポッカリ開いていた。下まで落ちたら、ザイルがなければ引き揚げることはできないだろう。CLが『もう少しで頓所さんの二の舞になる所だった』と胸を撫で下ろしていた。「もしも」のことを考えると、空恐ろしい。この下は大きな滝だった。

気を取り直し、板をザックに括り付け、新建尾根の雪壁に取り付いた。ザックの重量は私で２３ｋ。ＣＬのラッセルの後でも時折膝上までズボッと埋まり、身体を抜くのに容易ではない。板が枝に引っかかると、跳ね除けるのに少しでも身体のバランスを崩すと一気に下へ滑落だ。片方はピッケル突き立て、片方の手は拳骨で雪に突っ込み、一苦労して尾根の手前にたどり着いたと思ったら、雪庇の張り出しにクレバスが所々に走り、とても怖くて乗っ越せない。苦労して登った尾根でも潔く退散と決める。

基に戻り、山際をトラバースしてもう５０ｍ下ると、今度はしっかり尾根の間に一部雪庇のない、へ込んだ箇所が確認できた。此処しかないと再び急登をつめる。先程よりは楽に登り、尾根に上ることができた。一服した後すぐに出発。ラッセルが厳しい。右側は大きく張り出した雪庇。右側はストンと切れ落ちた急峻な壁。その険しい痩せ尾根が、まるで大蛇のようにうねりながら遠く容雅山へと続いていた。

針のむしろのような尾根上の「つぼ足登高」に汗が噴出す。「私は落ちない。私は平気だ。」心にそう暗示をかけ、目が眩みそうな頂上直下の急峻なトラバースを渡り終え、頂上に立ったときはホッとすると同時に成し遂げた嬉しさと喜びが身体中を駆け巡った。この容雅山には夏道はない。確かに納得。振り返れば、切り立ち、うねったヤセ尾根の遥か向こう、幾重にも折り重なった山々の先にツンと鼻を高くした火打ちが見えた。360度の展望は素晴らしく、正に山岳風景そのもの。火打ちの並びには猛々しい妙高が、前方には三角錐のように尖った不動山が鎮座している。そして、これから滑り込み登る大毛無山の山塊が、素晴らしく恐ろしい見事な雪庇を見せていた。

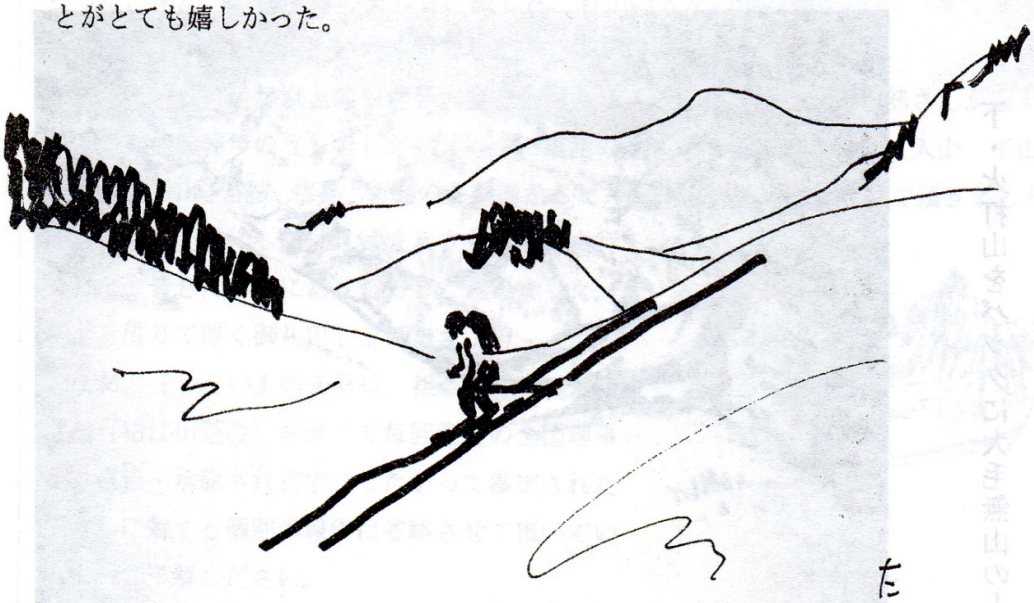
余韻覚めやらぬうちに、遥か遠くに見える大毛無山を目指して最初の滑り出しだ。尾根は狭く急な斜面だが無木立。モナカに近いが足元に違和感は感じない。「いける」重い

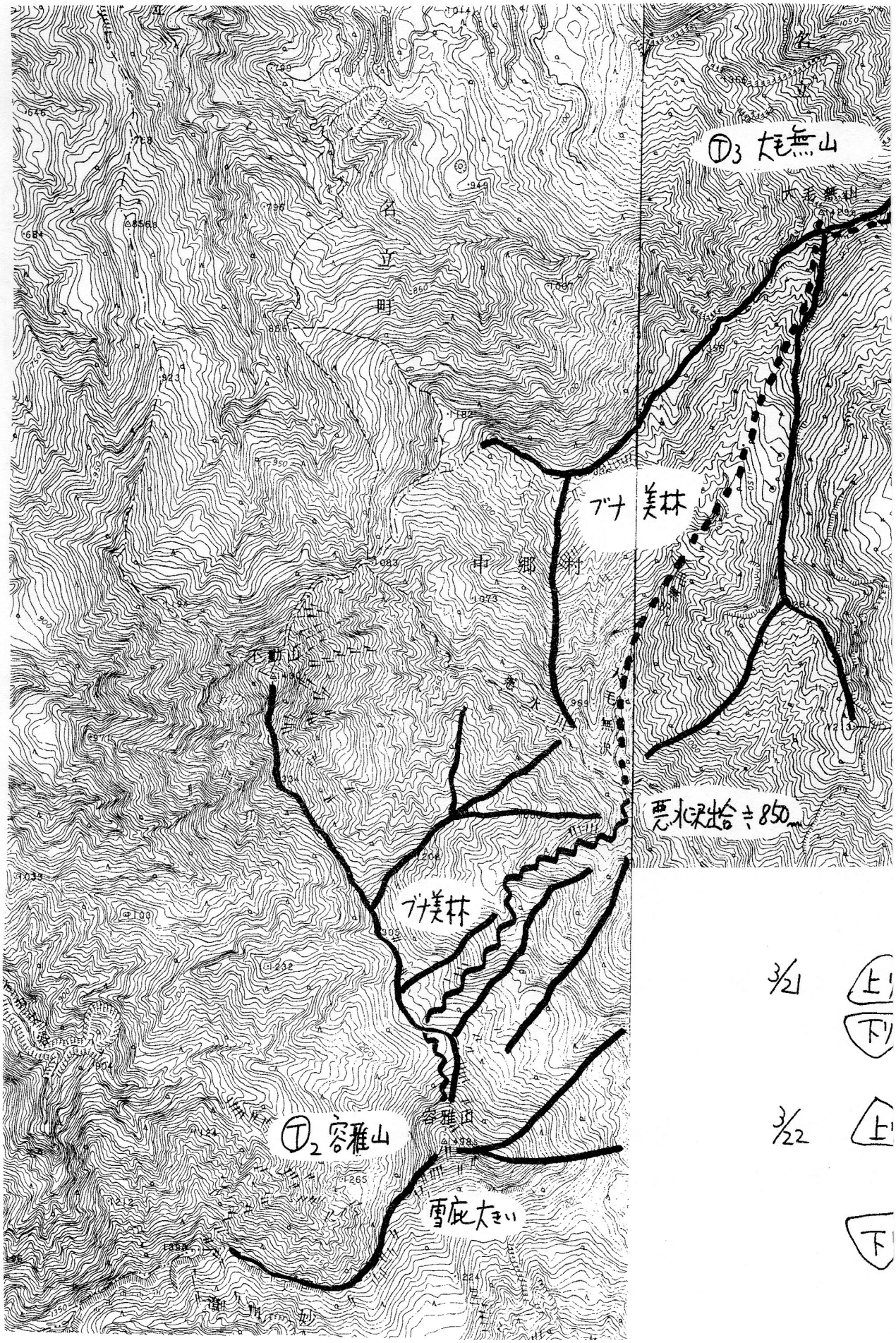
荷物も滑る時には気にならず「ウーン、快感」。今日のハイライトだ。堪能する間なく終わり、そのまま沢に突入。とたんに雪は重く、２，３回ターンする毎に腰を折ってゼーゼーハーハー。太股に力が入りすぎてしんどい。途中から樹林帯を縫って悪水沢８５０m地点まであと少し・・・という所で、一休みしながら腹ごなしをする。雪を溶かしてラーメンを作り（うまいんです。これが）すすっていると、ツアーらしいパーティが６、７人登って行った。容雅山往復と言っていたが、この時間で行き着くのかなと人事ながら心配になる。

ここからシール登行とする。悪水沢を渡り大毛無沢をつめる。緩やかな登りは辛くはないが、荷物と疲れで足は重い。無言でひたすら板を引きずるだけだ。延々と続くダラダラ登りにウンザリする頃、上で人の声が聞こえ頂上は近い。しかし、落ち着いて見渡すとこの辺りの斜面は素晴らしくイイ。山スキー愛好者の為のような、雄大な広がりと適度な斜面が悪水沢まで延々と続いている。「此処なら皆で来れるね」そう言える場所だった。来年はそうしよう・・・とCLが頷く。

先に着いたＣＬはもう滑る準備をしていた。下に見えるはＡＲＡＩスキー場。本当に山のてっぺんから滑り込めるんだ。もう終点は近い。一気に疲れも吹っ飛び快適に飛ばす。いやぁ一参った。長い。ながい。何と長いこと。そしてスキー場の建物の凄いこと。ここは日本か・・・と本当に感心してしまった。地ビールの看板を生唾ゴックンして過ぎ、ラーメンの三文字を横目で流し、大石と花澤の待つ駐車場へと急いだ。

昨年のオートルートも厳しかったが、このコースも勝るとも劣らない。テン泊の縦走は技術もさることながら超体力勝負だ。今回は荷物の重さとベタ雪の重さで参った。しかし、苦しみは喜びと紙一重。達成すれば感動も倍になる。本当に充実した心に残る山行ができたことがとても嬉しかった。

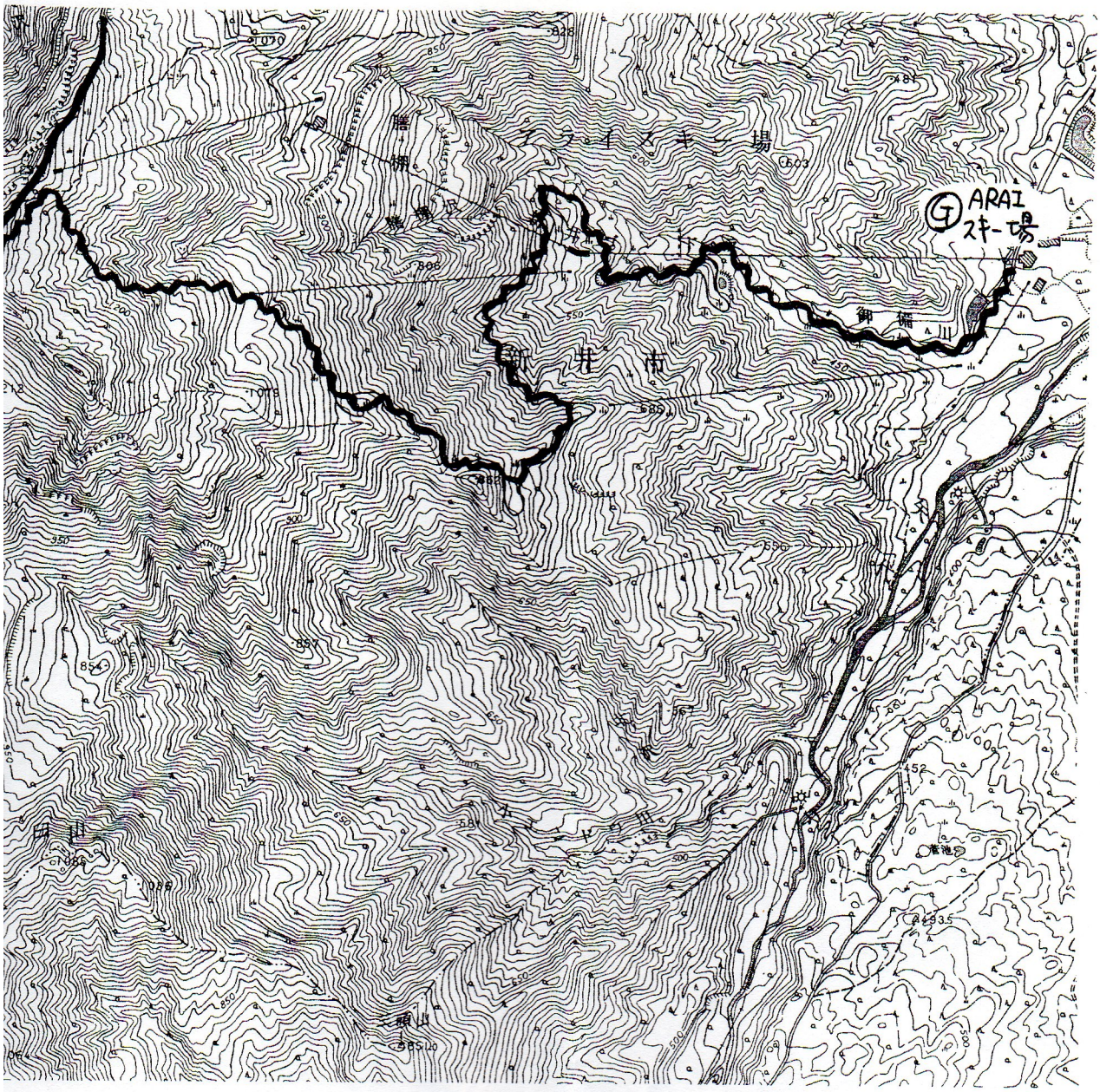




3/21 上
下

3/22 上

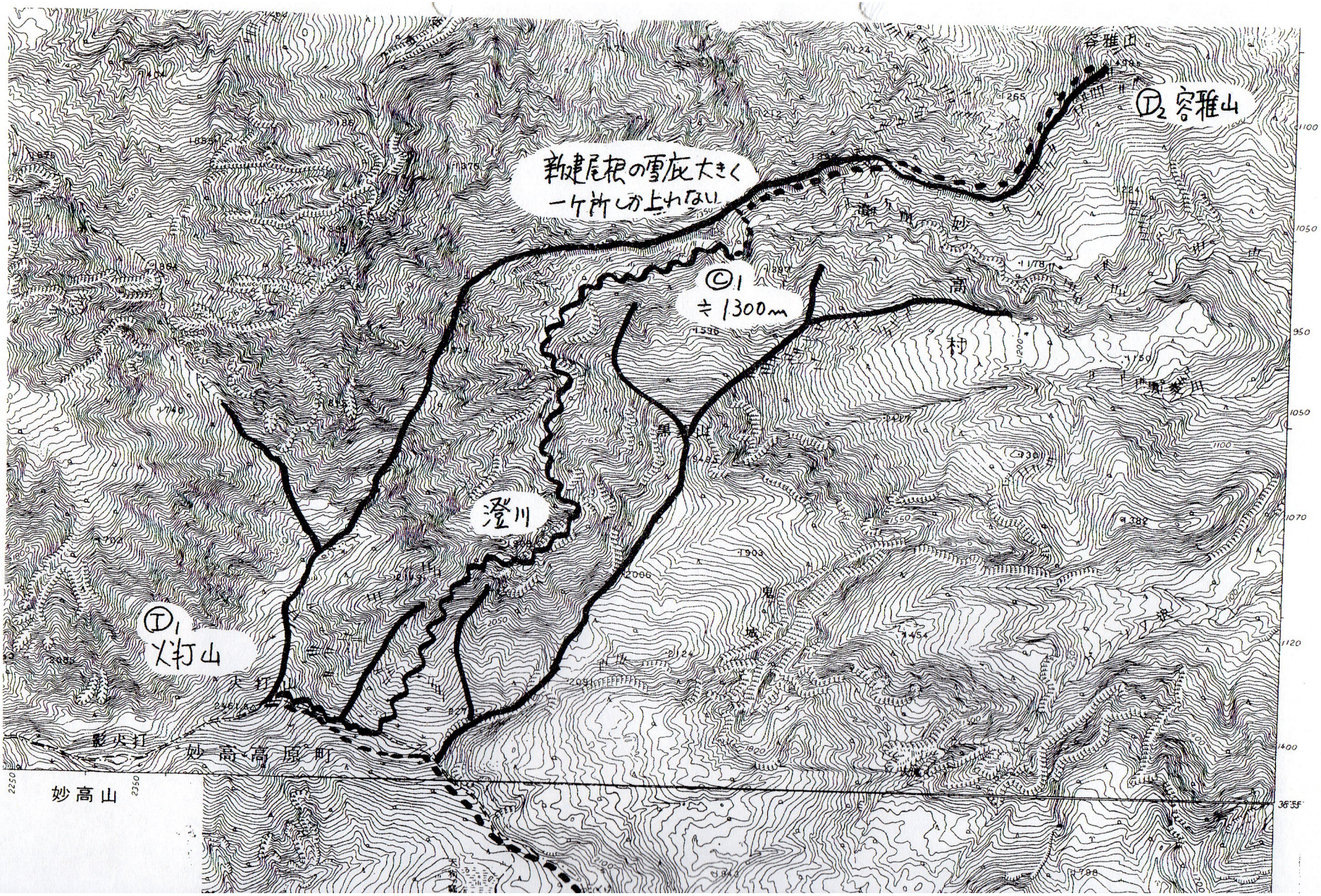
下

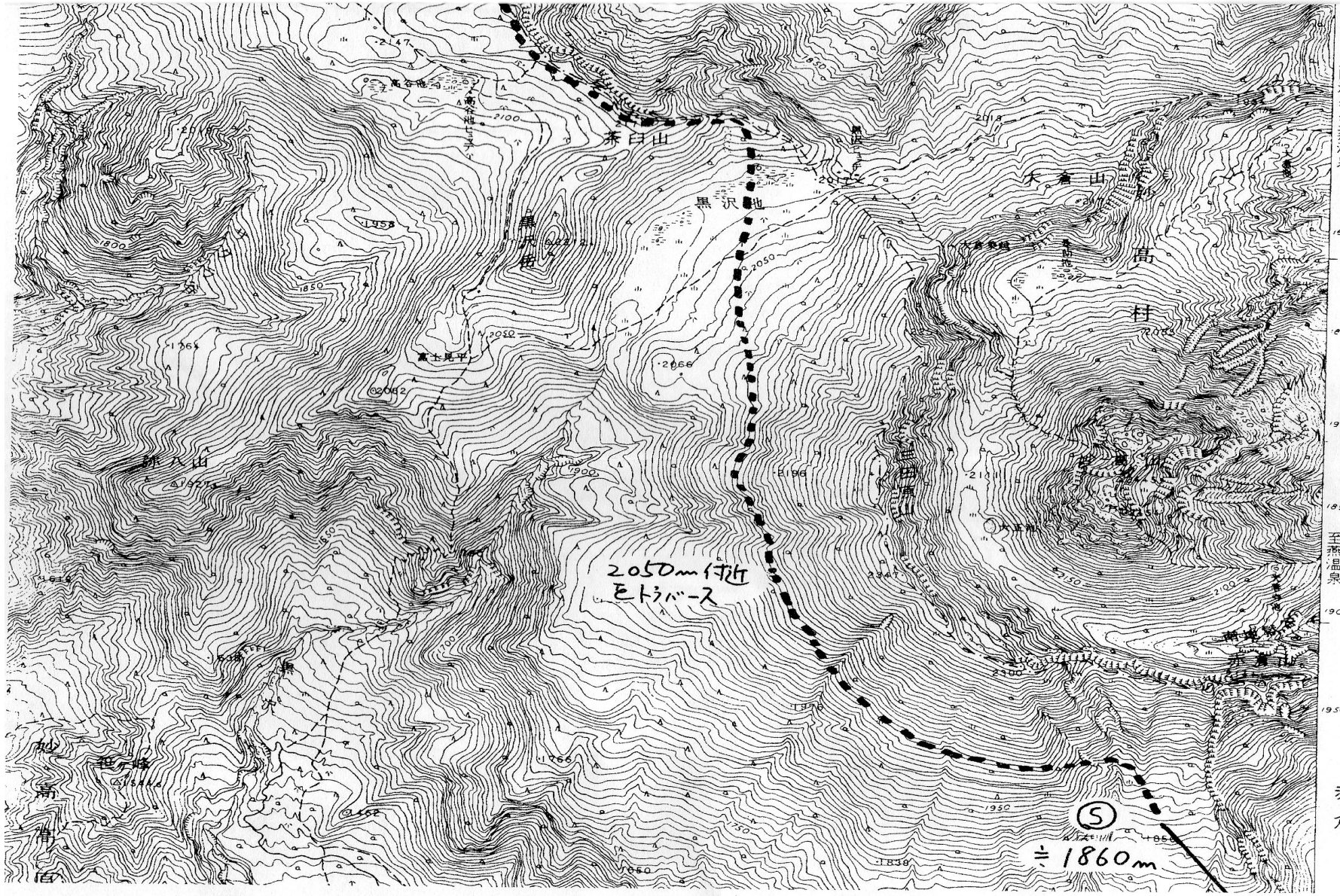


ナミリフト終点 ≒ 1860m ～ 火打山 ≒ 600m（ただし長い・シール登行）
火打山 ～ ⓒ1 ≒ 1137m

澄川 ～ 容雅山 ≒ 200m（ただしヒザ上のラッセル・ツボ足）
悪水沢 ～ 大毛無山 ≒ 600m（シール登行）

容雅山 ～ 悪水沢出合 ≒ 650m
大毛無山 ～ ARAIスキー場 ≒ 1100m


容雅山
Ⓓ2 容雅山
新建尾根の雪庇大きく
一ケ所しか上れない
Ⓒ1
≒1300m
澄川
Ⓓ1
火打山
妙高高原町
妙高山


至関温泉
至燕温泉
赤白山
黒沢池
大倉山
高村
2050m付近
トラバース
⑤
≒1860m